

ミュージアム・レター

Gakushuin University
Museum of History

Museum Letter No.14

発行日 ● 平成22年(2010)9月1日

もくじ

ごあいさつ	1
白樺同人と学習院	2-3
《特別企画》辻邦生・北杜夫 もうひとつの友情物語	3
Information	4
・史料館講座特別企画「古典の日推進フォーラム2010 in 東京」	
・平成22年度常設展「学習院と文学—雑誌『白樺』の生まれたところ—」	

学習院と文学

—雑誌『白樺』の生まれたところ—

2010年10月1日(金)～12月11日(土)
北2号館1階 史料館展示室 入場無料
平日…12:00～17:00 土曜日…10:00～17:00
閉館日…日・祝日、10/29(金)、10/30(土)
※詳しくは4ページをご覧ください。

1. ごあいさつ

学習院の同窓生有志による文芸雑誌『白樺』の創刊(1910年4月)から丸1世紀、学習院大学史料館では、これを記念して「学習院と文学」をテーマに展覧会を開催いたします。企画を進める途上で、同窓会を通じてこのテーマに関する情報の提供を呼びかけてはどうかという助言をいただき、チラシを配布してみました。すると予測を上回る大きな反響があり、たしかに学習院は「『白樺』の生まれたところ」なのだ、改めて実感した次第です。

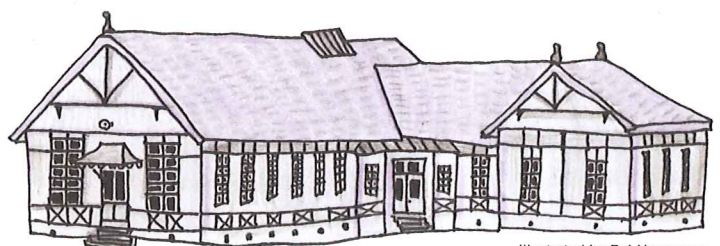
『白樺』が大正期の文壇に新風を吹き込んだことはいまでもありませんが、同誌はまた、西洋美術を意欲的に紹介し、当時の画壇を刺激したばかりか、一般の人々の美術への関心にも大きな影響を与えました。「本物」に接することがままならない時代に、主に出版物を通じて西洋美術の理解に努め、その成果を執筆や展覧会開催で多くの人と共有しようとした『白樺』同人たちの志は、西洋美術史を専門とする私が特に共感を覚える点です。

ところで、なぜ雑誌の名前を「白樺」としたのか、この機会に調べてみたところ、名前を決めあぐねた結果、「色をとりあはせて見てとうとう出来た名が、白樺だった。白樺の名を得た時、皆は白樺と云ふ樹を愛してゐたのであつた。しかし考へだす時は、色の方から考へた」と武者小路実篤が書いていました(『白樺』1917年12月号)。意表を突く命名法ですが、日本では高原、つまり都会からみた「避暑地」を連想させる樹である白樺は、いかにも当時の学習院出身者のイメージにふさわしく、卓抜なネーミングだったといえそうです。

この展覧会では、白樺派以外にも学習院ゆかりの文学者を取り上げました。その中で、辻邦生は私の大学院時代の恩師の夫君として面識もあり、懐かしく思い出される存在です。長年学習院大学フランス文学科教授を務めながら、質量共に並外れた作品を著し得たことは、「たえず書く人」(佐保子夫人の言)であったにしても、私にはやはり奇跡のように思われます。

末筆ながら、本展開催にあたり御助言や御協力を賜りました皆様方に、厚く御礼申し上げます。

(館長 高橋裕子)



illustrated by Rei Hasegawa

現史料館(かつて三島由紀夫が『チボ一家の人々』を借りて読んだ図書館)